



京都市文化観光資源保護財団

会報

No. 41



もくじ

- 随 想「古都の初春」 京都府神社庁庁長 三 條 實 春 P 4
わたしと京の文化財(10)「京の文化財をまもって」 P 6
目で見える京の文化財 No.11 「京の塔」 P 8
古い寺に住んで〈18〉 神泉苑住職 鳥 越 正 道 P 10
京のみちを歩く〈1〉 「東山山麓」 P 11
京のよさをまもって(4)「祇園いまむかし」
京都花街組合連合会会長 中 島 勝 蔵 P 12
京の伝統行事芸能 ④ 「蹴鞠」 P 14

会報題字 理事長 佐伯 勇
表 紙 教王護国寺(東寺)五重塔黎明

会	報
No. 41	60. 1. 1
編集・発行 財団 京都市文化観光資源保護財団 法人 京都市左京区岡崎最勝寺町京都会館内 〒606 電話 075-752-0235 (代)	

謹 賀 新 年

謹んで新春のお慶びを申し上げます。

旧年中は、当財団の運営に格別のご支援、ご協力を賜わり厚くお礼申し上げます。

本年もより一層のご支援、ご協力を賜わりますようお願い申し上げます。

昭和60年元旦

財団法人京都市文化観光資源保護財団

会長(京都市長)

今川正彦
佐伯 勇

理 事 長

募金にご協力いただき ありがとうございました

寄付者芳名録(敬称略) 59.6.15~59.11.14

一法人及び団体の部一

〔特別会員〕

- ※株式会社 三和銀行 <7,500万円>
- ※松下電器産業株式会社 <6,300万円>
- ※近畿日本鉄道株式会社 <4,500万円>
- ※京阪電気鉄道株式会社 <4,500万円>
- ※阪急電鉄株式会社 <4,500万円>
- ※京都中央信用金庫 <3,600万円>
- ※三井信託銀行株式会社 <1,300万円>
- ※三菱信託銀行株式会社 <1,220万円>
- ※住友信託銀行株式会社 <1,200万円>
- ※東洋信託銀行株式会社 <850万円>
- ※安田信託銀行株式会社 <850万円>
- ※立石電機株式会社 <800万円>
- ※日本新薬株式会社 <800万円>
- ※伏見信用金庫 <700万円>
- ※株式会社 ワコール <600万円>
- ※中央信託銀行株式会社 <450万円>
- ※財団法人 不審庵 <370万円>

- ※日本信託銀行株式会社 <350万円>
- ※山一證券株式会社 <240万円>
- ※近畿急便株式会社 <220万円>
- ※名古屋鉄道株式会社 <187万5千円>
- 株式会社 山中工務店 <50万円>
- 財団法人有職文化協会 <50万円>

〔普通会員〕

- ※丸布株式会社 <42万円>
- ※京阪コンクリート工業株式会社 <23万円>
- ※織悦株式会社 <21万円>
- 古都企画株式会社 <20万円>
- ※京都府中小観光旅館組合 <16万円>
- ※株式会社 曾根商店 <12万円>
- ※土屋 便利堂 <12万円>
- ※旅館 松葉亭 <12万円>
- 京都馬長連合会 <10万円>

〔賛助員〕

- ※株式会社 日産建設 <8万円>
- ※ヤマカワ株式会社 <6万5千円>
- ※ふじや <4万5千円>
- ※株式会社土井志ば漬本舗 <4万円>
- ※山田繊維株式会社 <2万3千円>
- ※明和管工業株式会社 <1万3千円>
- ※株式会社 岩佐商店 <1万円>

一個人の部一

〔個別会員〕

- ※狩 郷 修 <54万1千円>
- ※田 中 長 兵衛 <30万円>
- ※梅 岡 大 祐 <29万3千円>
- ※岩 佐 氏 熙 <20万円>
- ※丹 治 富 藏 <20万円>
- ※竹 村 實 <19万円>
- ※丸 山 未 棹 <16万円>
- ※石 田 豊 之 助 <14万円>
- ※高 島 国 男 <14万円>
- ※佐 野 綾 子 <10万3千円>
- ※竹 内 キ ミ 子 <11万円>
- ※高 橋 一 男 <10万円>
- ※奈 良 行 博 <10万円>
- ※水 野 弘 三 <10万円>

〔普通会員〕

- ※岡 本 保 止 <9万9千9百9拾9円>
- ※中 島 次 郎 <9万円>
- ※原 山 喜 代 <8万円>
- ※三 原 慶 三 郎 <7万8千円>
- ※赤 松 ふ み 子 <7万円>
- ※土 手 修 <7万円>
- ※山 田 岳 行 <7万円>
- ※加 藤 雅 一 <6万4千円>
- ※山 崎 長 三 郎 <6万3千円>
- ※神 崎 順 一 <6万2千円>
- ※上野山 志津子 <6万円>
- ※友 田 弘 治 <6万円>
- ※西 村 弥 五 郎 <5万2千6百円>
- ※小 林 多 三 郎 <5万2千円>
- ※井 上 嘉 久 <5万円>
- ※植 松 皆 昌 <5万円>
- ※林 順 子 <5万円>
- ※岩 佐 静 子 <4万5千円>
- ※大 嶋 真 治 <4万4千円>
- ※戸 田 紀 一 <4万1千円>
- ※加 来 大 忍 <4万円>
- ※那 田 可 つ <4万円>
- ※野 田 茂 樹 <4万円>
- ※山 田 省 曹 <4万円>
- ※辨 官 弘 晃 <3万8千円>
- ※矢 野 芳 子 <3万4千5百円>
- ※井 田 喜 智 郎 <3万3千円>
- ※原 満 寿 子 <3万円>
- ※安 田 孝 夫 <3万円>
- ※駒 井 桂 之 助 <2万7千円>
- ※大 野 健 三 <2万6千円>

- ※新 庄 英 雄 <2万5千円>
- ※宮 下 満 喜 子 <2万5千円>
- ※遠 藤 伊 之 助 <2万4千円>
- ※西 原 寿 子 <2万4千円>
- ※松 嶋 芳 子 <2万3千円>
- ※青 木 文 子 <2万円>
- ※伊 藤 重 和 <2万円>
- ※田 井 四 郎 <2万円>

〔賛助員〕

- ※高 木 春 代 <1万8千5百円>
- ※平 野 和 彦 <1万8千5百円>
- ※盛 田 准 子 <1万8千円>
- ※吉 本 明 子 <1万7千8百円>
- ※近 藤 吉 男 <1万6千円>
- ※山 田 順 三 <1万6千円>
- ※福 島 善 孝 <1万5千円>
- ※高 広 康 子 <1万2千6百5拾円>
- ※金 井 利 夫 <1万2千円>
- ※本 多 恒 治 <1万2千円>
- ※梶 村 ふ み 子 <1万1千円>
- ※野 村 鉄 治 <1万1千円>
- ※西 田 実 <1万円>
- ※手 塚 栄 子 <1万円>
- 平 野 昭 子 <1万円>
- ※澤 田 周 一 <9千円>
- ※渡 辺 菊 <9千円>
- ※五 浦 克 枝 <8千円>
- ※杉 田 実 <7千円>
- ※森 田 俊 子 <7千円>
- ※磯 松 良 純 <6千円>
- ※岸 本 幸 子 <5千円>
- ※北 口 貴 美 雄 <4千円>
- ※篠 原 茂 <4千円>
- ※田 中 春 代 <4千円>
- ※西 村 孝 一 <3千5百円>
- ※新 庄 義 雄 <3千円>
- 田 中 敏 <3千円>
- 横 田 与 一 郎 <3千円>
- ※馬 淵 初 男 <2千5百円>
- 仲 要 藏 <2千円>
- 山 本 勇 子 <2千円>
- 荒 川 敏 雄 <1千6百円>
- 伊 藤 美 奈 <1千円>
- 伴 政 子 <1千円>
- 向 畑 功 子 <1千円>

(※印は、追加寄付の篤志者、寄付金額は累計額。なお、昭和59年11月14日以降の寄付者の方につきましては紙面の都合により今後、順次紹介させていただきますのでご了承下さい。)



「随 想」

古都の初春

京都府神社庁庁長

三 條 實 春

東は知恩院、西は妙心寺をはじめ、あちこちから一せいに鳴りわたる除夜の鐘が山城盆地の闇の彼方に消え去ると、京都にも開春の元旦がやってきます。

一陽来復の新春。それは独り暦の上のこのみではなく、私たちの心身をはじめ、物皆が新鮮さとはつらつさを取り戻します。

古来、元旦には歳神さま（歳徳神）が来訪され、家々に祝福を与えて下さる、と私共の祖先は確く信じてまいりました。それ故に大晦日には家の内外をきれいに掃除し、門前には門松をたて、戸口には注連飾り（しめなわ）をしてお迎えいたしました。また若水汲み、炊事の火つけ、歳徳神への供物扱い等々、家の祭事にあずかる「年男」は随分と忙しい時を過しました。

さてこの歳神さまは、では何処からこられるのでしょうか。いうまでもなく神の国から来られるのですが、その神の国は、大空高い“高天原”と信ぜられ、この神を“客人神”と称えて饗応（くわおう）申し上げるので、海原遙か遠い彼方の「常世（とこよ）の国」とも信じられました。古くからわが民族は神は常に私どもの住む「中つ国」すなわち顕世（けんせい）に「あれ」給うものと信じました。「あれ」は誕生する、出現する、降臨することを意味します。そして日本民族の信奉する神さまは、私たちと血縁的・地縁的なつながりのある実在であり、私どもは神の御子で、生まれながらにして神性を固有するものと考えられてまいりました。

た。従って神さまはその子孫の居住するこの世に喜んで降臨されるものと信じました。こういう神が一定の時期（季節）に私共の処へ来訪され、寿詞（ことば）（祝福の言葉）を賜（たま）わる。そうすると「言霊（ことだま）信仰」から必ず幸福がもたらされると信じられたのであります。

私たちは正月を迎え、歳神さまの寿詞を頂いて、我も人もまた万物も皆改まり、新たになり、若返りして生き抜く意欲が湧き出るのであります。

さて京都は、千二百年もの長い歴史をもつ古都であり、長年に亘って政治、経済、教育、宗教の殿堂として繁栄した王城の地ですので、有名な神社仏閣も数多く、古い伝統を現今に伝えている文化都市であります。従って新春行事にも古く優れた習俗が今なお多く残されています。前述の歳神さまをお迎えして御接遇申し上げ、ついで氏神さま詣（よ）でや日ごろ崇敬する大社・古社を巡拝する初詣、ついで年始廻り等々まことにあわただしくはありますが、それでもどこことなく明るくそして爽やかで、心温まる正月の一日であります。

初詣（はつげ）の人数の記録は全国たいへんなもので、統計によりますと、毎年総人口の八割近い多数にのぼっています。またわが京都市への一年間の訪問客は、四千万近くにも及ぶとのことですが、何が京都をしてこんなに魅力を感じせしめるのでしょうか。それは伝統をよく温存している歴史の町で、古いものが沢山現存されているからであると言えますが、またそれらの奥にある京都の街独特の雰囲気（穏やかで円やかで気品に満ちた）——心の故里の持つ魅力とでも申される——自分では気付かないが長く長くお互いの中に

生き続けているものと感應（きんごう）し合うものが沢山そこにはあるからでありましょう。なお此処には信仰の面から申しても多数の神社や寺院や教会があって、一見渾然としておりながら、克く人心の安定に大きく貢献していること。このような京都の特色は断固として消滅せしめてはならないのであります。

京都国体もそして奠都千二百年にあたる記念の年も間近かに迫っています。これを成功裡に挙行するには、京都に住む私どもが、まず先人の営々として築き上げてくれたこの京都の持つ

魅力を守り抜くと同時に、一層人の和と物の保存・節約に、さらに極端に薄れ去った道義（みちぎ）の恢復（かいふ）に真剣（しんけん）に取り組まなくてはと心を新たに致す次第であります。かくすれば『朱子語録』にいう“陽（やう）気の発（は）するところ、金石（きんせき）もまた透（とお）る”で、精神一到、これは必ずや乗り切れましょう。

終わりに、今上陛下の御製（ごせい）を皆さまと共に拝誦（はいじゆ）いたしたいと思います。

天地の神にぞ祈る朝風の

海の如くに波立たぬ世を



写真は、平安神宮の初詣風景

京の文化財をまもって

京都には、全国でも有数のすぐれた文化財が数多く残され、いまでも所有者、管理者の努力により保存継承されています。しかし、これらの文化財も長い歳月とともに老朽化し、また損傷が甚しく修理を要するものも数多くあります。

『わたしと京の文化財』では、今回より現在文化財の修理にそれぞれの分野でとりくんでおられる方々のご苦労やご意見を紹介し、あらためて文化財保護の大切さを認識していきたいと思います。今回は、現在美術工芸品の修理に情熱をかたむけとりくんでおられるお二人をご紹介します。



文化財修理に たずさわって

伊藤 さとこ

文化財修理にたずさわって4年、私は数々の名品に出会い文化を産んだいにしえの人々の偉大な美意識に触れ、歴史を見直すほどの深い感動を覚えました。入社当初、私は、新しい社会の人間関係や表具師の世界に一日も早く解け込もうと無我夢中でした。入院患者の様に、運び込まれる痛々しく傷ついた絵画や書蹟を、数ヵ月数年後には、甦った様に修理し送り出した先輩方の業に目を見張るばかりでした。この4年間私は、自分の暮らしをはじめとする私達の生活様式が、目まぐるしく近代化してゆくなか生活に結びついた日本美術の文化的遺産を守る事の大切さを痛感致します。

たとえば、西洋でいえばドアや壁に値する、襖や屏風な

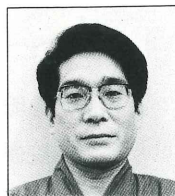
どは、生活空間を区切ると同時に装飾品であるという素晴らしい合理性をふまえ、また、保存上でいえば、掛軸などの絵画が、巻かれた状態で保存されるという事で、退色を免れ今日の世の人々に、深い感動をあたえるといった点など、東洋的合理性の賜ものであると思います。今となつては、昔の世の生活を推し量る事は、文化財を通してのみ出来る事です。その偉大な遺産を絶やす事なく、後世に伝えてゆく事の大切さを胸に、私は表具師として、長い伝統に培われてきた業で、時代が移り変わるなか数々の名品を守ると同時に、変わる事の無い人々の心の



文化財の修理は、長い修業期間と技術の習得が必要となる。
— 6 — (写真は、修理中の筆者)

感動をも守ってゆけるという誇りをもって、明日の仕事に取り組みたいと思います。

(嵯岡墨光堂 技術員)



仏像修理に とりくんで 山本 敏昭

私は、16年間文化財の保存修理にたずさわり伝統的な技術や知識を学んでおります。

しかし、未だ修理に対してその技術をどう生かせば良いのか非常に気を使っております。我々は彫刻、工芸品等の修理をしておりますが、品質、形状や時代の特色等さまざまであります。又、それぞれが個々にそのもちあじがあって、それを修理でどのようにして守るか、大きな課題であります。

たとえば、仏像の両手が欠失しているとしますと、その像の臍部や足の特徴とか、その仏像が作られた時代の特色等を考察して、ほぼその仏像が作られた時にあった手を作る事は出来るでしょう。しかしそれも、今、我々の創った手には変わりありません。又、技術や材料の発達にともない、過去に修理が非常に困難であった彩色や漆箔等の浮き上り、材質そのものの硬化等、今日では優れた合成樹脂の出現で修理が可能になりました。

しかし、それもその時代に作られた材料とは大違いであります。だとすれば、その文化財のもちあじを生かすとか、守る、というのは出来るだけ我々が、その文化財に対して手を加えないという事になり、修理は必要最少限にとどめ保存するにあたって、最大の効果を得る事だと

思います。それが今、我々の行なっている現状維持修理なのです。その事がとりまなおさず、文化財のもちあじを最大限に生かす事だと考えます。将来又、文化財が修理される時、今修理した事が邪魔になりたくないのです。個人の技量を駆使し過ぎると、折には、文化財の価値そのものを減少させる事にもなり得るのです。文化財はそれ自身もっているもちあじこそが文化財産であります。

我々、修理技術者は、それを損う事なく現状を守り、未来に伝えて行く事、又、その為の技術を伝承、発展させる事が、最大の仕事と考えております。 (財)美術院国宝修理所 現場主任)

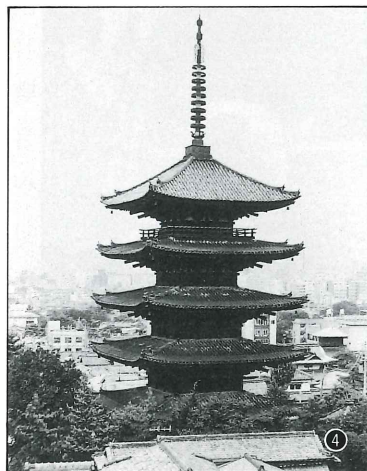
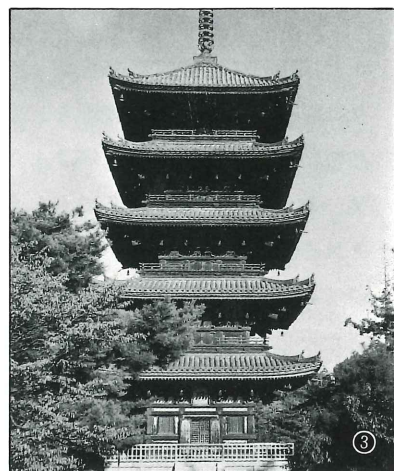
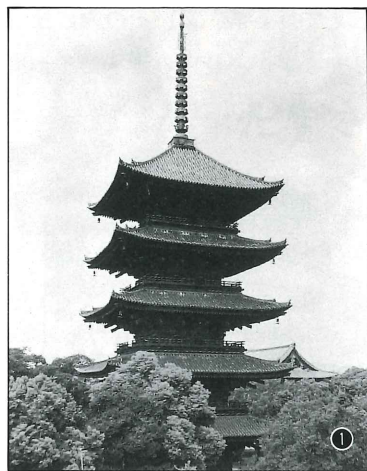


文化財修理は、そのものの価値を損なうことなくおこなわなければならない。写真は、美術院国宝修理所の仏像修理風景。(写真提供：京都国立博物館)

京の塔

京都には、いまでもさまざまな木造の塔がそびえています。これらの塔は本来、仏舎利（仏骨）を祀るためのものであったが、後に仏像を安置するなど信仰の対象として建てられるようになり、寺院伽藍の象徴ともなった。

今回は、古建築を代表する塔をテーマに京都のまちの象徴でもある五重塔を中心に紹介いたします。

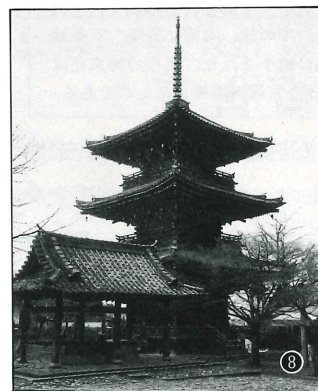
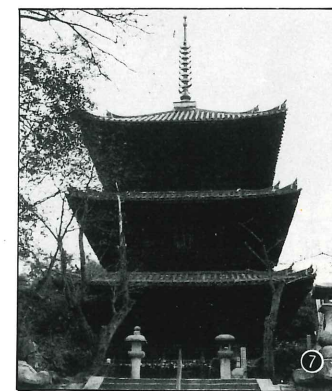
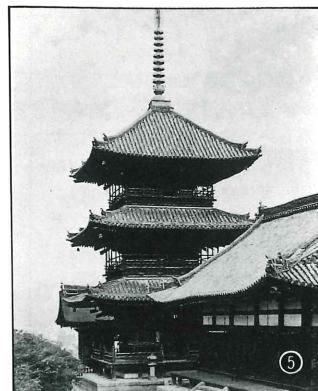


① 教王護国寺（東寺）五重塔 国宝 江戸時代 高さ約54.84メートル。わが国で最も高い塔である。たびたび火災をうけ焼失したが、現在のものは正保元年（1644）徳川家光によって再建されたもの。内部は、極彩色にいろどられ顕教四仏を安置する。（表紙写真掲載）

② 醍醐寺五重塔 国宝 平安時代 高さ約37.44メートル。下醍醐創建当初の建物で、天曆6年（952）に完成。平安時代中期を代表する塔で、京都に現存する最古の木造建造物。内部の板壁画は、日本の密教絵画の原流をなすものといわれる。

③ 仁和寺五重塔 重文 江戸時代 高さ約32.7メートル。徳川家光によって、寛永14年（1637）再建されたもので、東寺の五重塔とならんで江戸時代初期を代表する塔である。内部には、胎蔵界五仏を安置する。

④ 法観寺五重塔（八坂塔） 重文 室町時代 高さ約36.4メートル。創建時の塔は、治承3年（1179）に焼失、現在のものは永享12年（1440）足利義教によって再建されたもの。内部には、五大力尊像を安置する。

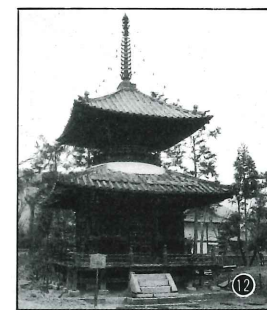
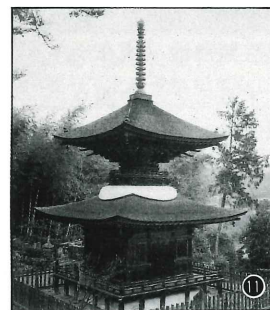
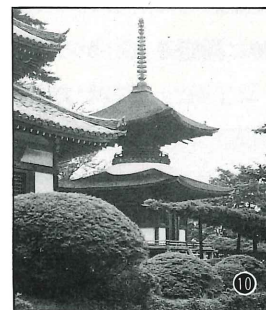
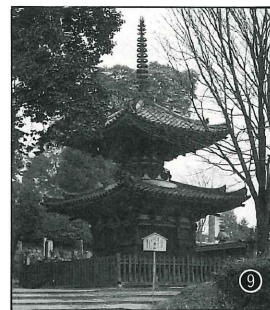


⑤ 清水寺三重塔 重文 江戸時代。寛永10年（1633）に再建されたもので、我国の三重塔の中では最大規模のもの。内部は、極彩色でいろどられ大日如来像を安置する。現在、創建以来始めて解体修理がおこなわれている。

⑥ 清水寺子安塔 重文 江戸時代。本堂の南方に位置する三重塔で、寛永10年（1633）の建立。桧皮葺、総丹塗りで内部には、子安観音（千手観音）を安置する。

⑦ 金戒光明寺三重塔 重文 江戸時代。徳川秀吉菩提のため寛永11年（1634）に建立されたもの。文殊塔とも呼ばれ、内部には文殊菩薩像を安置する。

⑧ 真正極楽寺（真如堂）三重塔 江戸時代。文化14年（1817）に再建されたもので、江戸時代後期を代表する塔である。



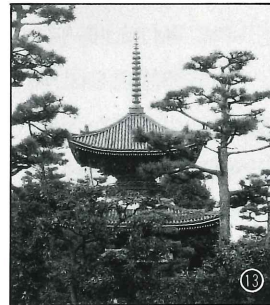
⑨ 宝塔寺多宝塔 重文 室町時代。永享10年（1438）の建立で、京都市内に現存する最古の多宝塔である。

⑩ 善峰寺多宝塔 重文 江戸時代。元和7年（1621）の建立で、桧皮葺、内部には愛染明王像を安置する。

⑪ 常寂光寺多宝塔 重文 江戸時代。元和6年（1620）の建立で、桧皮葺、内部には釈迦、多宝の二仏を安置する。

⑫ 清涼寺多宝塔 江戸時代。元禄13年（1700）釈迦如来の開帳が江戸護国寺で行なわれた際、建てられたものでその後当寺に移築されたもの。

⑬ 安楽寿院多宝塔（近衛天皇陵）桃山時代。御陵となっている唯一の珍しい塔で、慶長11年（1606）豊臣秀頼により再建されたもの。





古い寺に住んで 〈18〉

神泉苑 住職

鳥越正道

神泉苑は、京都のど真中であって平安京最古の史跡であるが、困ったことによく神社と間違えられる。石の鳥居や玉垣で囲まれているためか、あるいは頭に「神」のつく名称のためかとも思うが、れっきとした東寺真言宗の寺院である。しかし、珍らしいことに普通の寺院のように山号や寺号は一切なく、また開山・開基もなく——苑という寺名は他に類例がないと思う。この神泉苑の特色は、①もとは社寺ではなく禁苑（宮廷付属の庭園）としてスタートしたこと。②平安京造営当初を偲ぶ貴重な史跡（他には東寺のみ現存）であること。③後に宗教的霊場（弘法大師の請雨（824）、祇園御霊会の起源（863）など）となり、さらに寺院となったこと。④弘法大師の勧請された北天竺無熱池（現在チベット）の善女竜王を本尊とすること。の四点



平安京造営当時の史跡として今に残る神泉苑



しん せん せん
神 泉 苑

（京都市中京区御池通神泉苑町）

桓武天皇が、平安京造営の際、大内裏の南の沼沢をひらいて設けられた禁苑で、常に清泉が湧き出るところからこの名が生まれたといわれる。北は二条、南は三条、東は東大宮（現在の大宮）、西は壬生の各大路に面して南北四丁、東京二丁の広大な池域を占めていた。大池を中心にして周囲に林苑をめぐらし、池畔には乾臨閣、釣殿等の殿舎も設けられ、舟遊、詩賦、相撲、遊獵等の行事がよく催され盛大を極めたといわれる。天長元年（824）夏の早ばつに際し、弘法大師が祈雨の修法をおこない天竺の善女龍王を勧請して雨を降らし、また貞観5年（863）や貞観11年（869）に悪霊怨霊退散を祈って御霊会をおこない疫病を鎮めたことは名高い。その後、次第に荒廃し二条城造営の際、現在の敷地に縮小された。現在の神泉苑は、慶長12年（1607）筑紫の僧 快我が再興したものである。

であろう。1200年近い星霜を経た間には、当然幾多の栄枯盛衰もあったが、もっとも痛手を受けたのは、慶長7年（1602）徳川家康の二条城造営であった。このとき神泉苑の北部は、削られて池水の水源である「神泉」は城の内濠にとりこまれ以後、神泉苑は城からのもらい水で池をうるおしているわけである。苑の全域が国の史跡に指定され、かろうじて今日まで保存できたのであるが、苑内には文化財指定建造物など一つもなく、大都会の真只中であって現状と風致を維持することはなかなか困難なことである。幸い、国・府・市当局や保護財団から補助をいただき、また地元、信者よりのご寄付を仰いで景観や建物などの維持修理を図り、また神泉苑狂言（壬生狂言から分派）が京都市の無形民俗文化財に登録されて、手厚い保護を受けることになったのは有難いことであ

る。ただ、ちかく地下鉄御池線が苑の北側を通る計画と聞く。地下鉄であるから完成すれば景観風致の保全に支障はないと思うが、二条城から暗渠を通して本苑に流れこんでいる水流に変動のないように祈ってやまない。

ともあれ、かつては平安貴族の遊樂の地であったこの神泉苑を、開かれた一般市民のいこいの場として、また昔を偲ぶに足る名苑として永遠に残してゆきたいものである。

京のみちを歩く 〈1〉

《 東 山 山 麓 》

伝統的建造物群保存地区制度は、昭和50年の文化財保護法の一部改正により設けられた。この制度は、長い歴史に育まれた伝統的な町並み、集落をその周囲の環境と共に保存しようとするもので、京都においては「清水産寧坂地区」「祇園新橋地区」「嵯峨鳥居本地区」が選定されている。その一つ清水産寧坂地区は西国第十六番札所である清水寺の門前町として発達、京都には珍しい坂道の両側には、骨董、陶器、竹細工などの風流な店がたちならびいかにも京都らしい町並みを形成している。京都を象徴するように空に聳える八坂の塔もこの古い町並みにいかにも調和し、春秋の行楽に内外を問わず観光客が押し寄せる理由である。

平安神宮から神宮道をまっすぐ南に三条通を横切って、大楠のある門跡寺院青蓮院、わが国最大の三門を誇る知恩院、枝垂桜で知られる円山公園、有楽椿の月真院、秀吉夫人北政所ゆかりの地高台寺、二年坂、産寧坂、豪壮雄大な舞台の清水寺等々、このコースはまさに京都散策のゴールデンコースの一つといえよう。

—「京のみちを歩く」京都市文化観光局観光課発行より—



毎年5月1日から4日までおこなわれる神泉苑大念仏狂言。



京都らしいたたずまいの残る産寧坂。特別保全修景地区としてその景観がまもられている。





京のよさをまもって (4)

祇園いまむかし

京都花街組合連合会会長
中島勝蔵

祇園さんの名で親しまれている今の八坂神社のあたりは、遠く平安時代から花見や月見の名所として名高く、祇園社の周辺が賑わうにつれ、参詣人にお茶を出す茶店などもでき、今から三百余年前一定地域に限って、正式に茶屋営業が許可され現在の祇園町の誕生となるのである。

祇園については、既に多くの文学者や歴史家或いは好事家によってそれぞれの視点から語られもしくは書物となって世に広く伝播されていますが、私はやはり祇園を知りたいと思われる方が自らの目で祇園を見ていただくことが祇園を知る最良の方法だと思う。明治維新の頃には、諸国の藩士が盛んに祇園で遊んだことからいわゆる勤皇芸妓の出現となり、彼らが後に明治の元勳として名をなすに到って祇園町は大いに余恵を蒙ったことなど時流と共に歩む祇園の一面がうかがえる。大正初期、経済の好況下のもとで祇園は社交場として黄金時代を形成したがやがて、昭和初期の不況の到来で祇園も少なからずその影響を受けたのであった。しかし、程なく祇園本来の風潮をとり戻し、室町老舗や全国からの染織関係の旦那衆の接待や憩いの場として、或いは文人雅客の交遊の地として殷賑を極め、歓楽境となった。当時の、のんびりしたおおらかな風情を追憶する時、感慨まことに深いものを覚えるのである。しかし、時流は迅速に変転して第二次世界大戦をむかえ祇園にとっては、まことに厳しい道を歩むことになるので



ある。戦時中、芸妓達は或る時は傷夷軍人の慰問に優しい奉仕活動が続けたり、敵機の本土空襲の危機が増すにつれて防空訓練に励んだりその真剣さは、今も語り草になっている。その頃、祇園号と名付けた戦闘機2機を単に献納したことも忘れられない。戦局も、愈々激しさを増し営業が全面的に停止されてからは、軍需産業系の各種工場へ女工として勤め、奉仕活動に目ざましい働きをみせたのであった。しかし、このような祇園町あげての活動も空しく、やがて終戦を迎えたが戦時中の疎開で祇園の町並みもすっかり変貌し、戦後の衣食住が困窮を極めていた状況の下で、特有の心意気を発揮して平和の担い手としての役割を果たすため、いち早く芸能活動を始めたのであった。爾来、40年幾多の困難にも屈することなく祇園の復興に努め、今や全国にまれな一大芸能集団として今日に到っている。そこには、必然的に伝統を誇りとする美風が生まれ、技芸の修得には常に積極的であって、時代をさきどりする性格と共にこれらげとけあって、祇園独自の風格を保ってきたということが出来るのである。

京の主な年中行事 (1月～4月)

1月

大晦日～1日	おけら詣り	八坂神社
1～3日	皇服茶授与	六波羅蜜寺
	(午前8時～午後5時)	
2日	鉦始め (午前10時)	広隆寺
2～4日	神前書初め	北野天満宮
3日	かるた始め (午後1時)	八坂神社
4日	蹴鞠始め (午後2時)	下鴨神社
5日	大山祭 (正午～)	伏見稲荷大社
8～12日	初ゑびす	恵美須神社
9～16日	御正忌報恩講	西本願寺
10日	初金比羅	安井金比羅宮
12日	奉射祭 (午後2時)	伏見稲荷大社
14日	法界寺裸踊り (午後7時)	法界寺
15日	柳のお加持と弓引初め	三十三間堂
	(午前8時～)	
15日	泉涌寺七福神めぐり	泉涌寺
	(日出～日没)	
21日	初弘法	東寺
25日	初天神	北野天満宮

2月

2～4日	節分祭	市内各社寺
8日	針供養 (午後1時)	法輪寺
23日	五大力尊仁王会 (午後1時)	醍醐寺
23日	五大力尊法要 (午後～)	積善院準提堂
24日	さんやれ祭	上賀茂神社
25日	梅花祭 (午前10時)	北野天満宮

3月

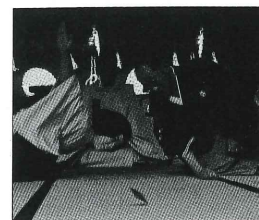
12日	芸能上達祈願祭	法輪寺
-----	---------	-----

14～16日	涅槃会	泉涌寺・東福寺ほか
15日	嵯峨大念仏狂言	清涼寺
	(午後2時～6時)	
	嵯峨お松明 (午後8時)	〃
18～24日	春の彼岸会	各寺院
30日	はねず踊り (正午)	随心院

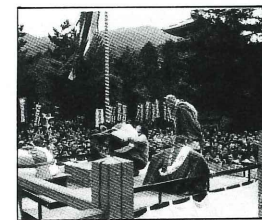
4月

1～18日	観桜茶会	平安神宮
7・13・14日	嵯峨大念仏狂言	清涼寺
	(午後1時30分～)	
8日	花まつり	清涼寺・知恩院ほか
14日	太閤花見行列 (午後1時)	醍醐寺
14日	やすらい花	今宮神社・玄武神社・川上大神宮社
19日	お身拭い大法要 (午後2時)	清涼寺
21日	吉野太夫花供養 (午前11時)	常照寺
28日	松尾大社神幸祭 (午前11時)	松尾大社
29日	曲水の宴 (午後2時)	城南宮

※都合により行事・日程が変更される場合がありますのでご了承下さい。



かるた始め



五大力尊仁王会



泉涌寺涅槃会



太閤花見行列

蹴鞠

けまりは、奈良時代に中国から伝来されたもので、平安時代に貴族の間で独自に発達し、藤原氏栄華の頃が最も盛んに行なわれたようである。最初は、宮廷を中心とした貴族達の遊戯であったが、鎌倉時代以降次第に武士や一般庶民にまで普及し、その作法、流儀、装束なども順次整備され、今日伝えられているような「けまり」になったことが当時の絵巻や文献によって知ることができる。

回けまりの主な公開日と場所

1月4日 蹴鞠始め	下鴨神社
7月7日 七夕祭(梶鞠)	白峯神宮



蹴鞠始め(1月4日下鴨神社)



蹴鞠について

蹴鞠保存会会長

持明院基邦

蹴鞠は、千四百年の伝統と歴史をもつ日本独特のもので、御所を中心におこなわれ今日に伝えられております。その伝統と特徴が、いずれの時代にも少しもそこなわれる事なく続けられてきた事は、誠に幸いな事と思われま。

この蹴鞠の特徴の一つに現在のスポーツと異

なところは勝負のない事です。これは、一見平凡でかつ刺戟のないものと思われまが、自分が上手にかつうまく蹴ろうと思えばまず、他の人に蹴りやすい鞠を蹴り渡すということが原則とされ、上手な人は下手な人を、強い人は弱い人を、若い人は老いた人をいたわり、助けつつ、和気あいあいの中の一つの鞠を姿美しくリズムカルに蹴りつづけるもので、

これは単なるスポーツにやまず精神の修養と向上を兼ねそなえたものであります。

(親子三代が同座して蹴鞠をした記録もありました。)

鞠は、鹿皮二枚を馬皮で縫いあわせこれを球形に仕上げ、表面には白粉がほどこされ直径約20センチ、重さ約150グラムで、皮は特殊な^{なめ}し方をして鹿皮の弾力をうまく利用したものであります。この鞠を中心に6人又は8人が鞠庭にたち、作法に従って10分から20分蹴りつづける座は終わります。普通14メートル平方ぐらいの広さで、又四隅に松、柳、桜、楓等を植えてあるのが定めですが、臨時な鞠会の催しは竹懸りと致します。寺社鞠には、^{ときまり}解鞠の儀式が行なわれます。今日、用いられている装束は、平安後期から鎌倉時代の頃に定められたもので、優美さのなかに運動に適したものになっています。又、作法もその頃定められたものといわれております。家元(飛鳥井家、難波家)もその頃、勅許され色目(階級)は家元より免許され



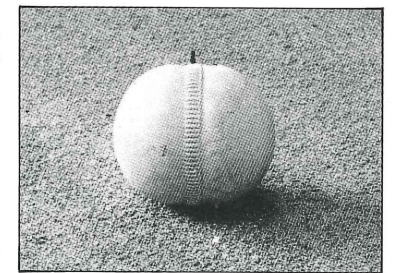
「都林泉名所図会」寛政11年(1799)成立

る事になっておりましたが、このことは、現在蹴鞠保存会に引きつがれております。

天智天皇即位以来、年の始め^{えん}申の日をもって蹴初の儀が行なわれていましたが、現在では1月4日、下鴨神社々庭において竹懸りにて新春の蹴初めをおこなっております。



解鞠の儀



鹿皮でつくられている鞠



蹴鞠の装束と鞠ぐつ

第41回文化財特別参観のご案内

「勸修寺」

今回は、京都有数の名刹勸修寺を訪ね、書院、庭園を中心に文化財を鑑賞いたします。

回参観日時 昭和60年3月23日(土)
午後2時(参観時間約2時間)

回対象者 財団募金協力者(会員)と
その家族

回申込方法 住所・氏名・年令を記入し、
返信用切手60円分を同封の上
封書によりお申込下さい。

回申込先 京都市左京区岡崎最勝寺町
京都会館内 〒606
京都市文化観光資源保護財団宛

回参加費不用

※お問い合わせは、財団事務局まで。なお、
参加ご希望が多い場合、制限することが
あります。

編集後記

あけまして

おめでとうございます



回今回の表紙は、いかがですか。朝日をあびた
東寺の五重塔、日頃見慣れている人々も何か
心があらわれる思いがいたします。

皆様にとって、新しい年がこの五重塔のよ
うに輝いた年でありますようにお祈りいたし
ます。

回昨年は、会員の皆様には募金をはじめ当財団
の事業にご協力いただきありがとうございます
しました。

本年も、より一層のご支援、ご協力の程、
お願い申し上げます。

京都の文化財をまもる

5億円募金にご協力を

— 京のよさをまもるこの運動への参加を

あなたのまわりの方々にも呼びかけて下さい—

当財団では、現在5億円募金運動を全国的
にすすめています。

京の四大家事をはじめとする京都の文化財
をまもる5億円募金を達成するために皆様も
金額の多少にかかわらずご協力をお願いいた
します。

○基金にご協力いただきます場合は、同封
させていただいております納付書により
ご送金下さい。

募金その他についてのお問い合わせは、
当財団事務局まで
(075)752-0235(代)

— 差別をなくして明るい社会をつくろう—